

井出恒雄著 『中世の文芸・非文芸』

板坂, 耀子
九州大学大学院博士課程

<https://doi.org/10.15017/12158>

出版情報 : 語文研究. 36, pp.56-58, 1974-02-28. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

紹介

井手恒雄著「中世の文芸・非文芸」

板 坂 耀 子

この本は十四の論文からなっている。一九六〇〜一九七〇年にかけて、種々の雑誌・書籍に発表されたもので、とり上げられた題材も式子内親王・西行・慈円らの和歌、方丈記、徒然草、平家物語、芭蕉の句、五山文学、川柳など、まことに多彩である。引用される書物にいたっては、藤村「若菜集」、佐多稲子の作品、宮本百合子の芸術論、更にはマルクス・エンゲルスの著述まで、まさに、枚挙にいとまがない。

しかし、これら多くの材料を使用して、著者が述べようとしたことは、「あとがき」で著者自身が記されるように、「一貫して、中世において何が文芸であり、何がそうでないか」ということであった。

巻頭論文「中世の文芸・非文芸」は、そのまま、この書全体の題名となっている。と同時に、内容的にも、これは、全体を通じて一貫している、著者の主張でもある。

著者の姿勢は、全論文を通じて、きわめて明確であるが、とりわけ、この巻頭論文においては、鮮明であり、これを巻頭にあげたのは大胆であるとさえ言えよう。この巻頭論文「中世の

文芸・非文芸」で、著者は、最近とみに話題となっている「何を文芸作品と見、何をそうでないとするか」の問題について、「それは困難な問題である」とされながら、まっ向から、この課題にたちむかい、はっきりとした見解をうち出された。

それは、一言で言うなら「文芸を否定するような姿勢や内容の作品は文芸とはいえない」という点に帰するであろう。そして、このような観点にたつて、著者は、最近、文芸作品としてとり上げらるべきであると主張されることの多い「正法眼蔵」「正法眼蔵随聞記」の類は、文芸作品としてとり上げるべきではない、それどころか、それらを文芸と認めることには、実はある種の危険が伴うのではないかと述べられるのである。なぜならば中世の社会では、和歌・連歌等の典型的な文芸作品は、それらを「いたづらごと」として排斥せんとした封建仏教イデオロギーの下で、ようやく細々と生きのびたのであり、「正法眼蔵」「正法眼蔵随聞記」等は、他ならぬその仏教のイデオロギーを徹底して肯定するものではないのか、と。そして、仏教が日本文芸史上に貢献し、すぐれた作品を生む力となったとい

う説にも、強い疑問を投げかけられて、仏教は、むしろ日本
芸史において、ブレイキとして作用したのだと主張される。

仏教の役割をこのように否定的にとらえるのは、著者が早く
から唱えられてゐる説である。それだけに反論も多く、様々な
議論を呼んだ。とりわけ、「何をもって文芸とするか」の問題
が、重要視されはじめてゐる。昨今、それに対する一つの答と、
著者従来の仏教に関する見解とが結合して示されたこの論文は
その後、「あとがき」で著者が述べられるように、一九六九年
度中世文学会の公開討論「中世法語の文学性とは何か」にまで
つながつていった。その討論の緊張と興奮がまださめやらぬ中
で、著者は、この書に収録された二番目の論文「法語文芸・非
文芸」を書かれたとある。著者はここで、更に具体的な例をあ
げられて、中世における仏教が具現してゐたところの非人間的
なストイシズム、男女の恋をしりぞけ、花月を賞することを拒
み、現世の楽しみを求めぬことを否定した仏教の思想を紹介さ
れて、このように、いわゆる文芸と、明らかに対決する主義を表
現している書物が、どうして文芸であり得ようかと、問いかけ
ておられる。

文芸・非文芸の境界線を、どこに、いかようにひくべきかに
関しては、勿論種々の論がある。著者のこのような定義にも異
論を持たれる方は、もとよりおられるであらう。だが、それは
さておくとしても、著者がいわれる「文芸を否定する」「文芸と対
決する」とは一体どういふことであるか、今少し詳細にみたい。

この定義を安易に理解し応用されることを、著者も恐れてお
られるようだ。既述した二論においても著者は、一見、文芸を
否定し、花月の情や男女の愛をしりぞけようとしているかに見
える作品の中に、実はそういう姿勢を表面で取ることによつて
かろうじて自らの人間的な欲望を表現することに成功している

ものがあることを指摘され、これらは勿論文芸といえる、それ
もすぐれた文芸であるといえる、とされた。真の意味での文芸
否定であるかどうかを、一々の作品について、読みとつていく
必要があるというわけである。

この指摘は、著者の「非文芸」の定義を完全にしておくもの
であると同時に、「文芸」の定義においても重要な柱となるもの
である。すなわち著者は、このように、何らかの制約のもとで、
正々堂々と語れぬことを、何とか工夫をこらして表現し、め
ざす相手に伝達するということこそ、文芸の本質であるとされ
るからである。この、工夫をこらして表現することを、著者は
「言語のクンスト（技術・芸術）」だと呼ばれる。

以上のような視点にたつて、一つ一つの作品を注意深く見つ
めていかれた結果が、以下の一つ一つの論文であると言つても
いいであらう。

中世文芸の上に常に重くのしかかった仏教の禁欲主義と、そ
れに対する抵抗としての文芸——著者は、それをくり返し我々
に説くのみならず、そのように見た時、我々が既に知りぬいて
いると思つた作品の一つ一つに、思いもかけぬ新しい解釈が可
能になることを実証してみせてくれる。式子内親王「花にも
思ふ」の歌が、「更級日記」と同様に、風流にあげられた過去
をはじらう述懐（それもまた前述のクンストではあるが）であ
ること、長明の和歌の中に、川柳のそれとも相通する大胆な仏
教冒瀆の精神がひそんでいること、「平家物語」冒頭の有名な
一文は単なる「諸行無常」ではなく、ひそかに激しい清盛（「
権力者」）批判をこめてゐるということ、更に、「徒然草」「方
丈記」、西行の歌等に見る、「人間らしさ」の主張、また、「徒
然草」の「つれづれ」は本来、深刻な意味など持たず、ただ、
「手もちぶさた」「退屈」という程度の意味にすぎぬこと——

